

聖書日課 『からし種』 2022.12.11-12.18

<p>12月 11日 (日) 民数記 23章</p>	<p>「バラムはバラクに答えた。『わたしは、主が告げられることだけを、と言ったではありませんか』(26節)。わたしたちは、自分の望むことを祈り、行いがちです。主が示されることだけを行い通すことは難しい。まして、権力の求めに対してどう行動するだろうか。「御心の天になるごとく、地にもなさせたまえ」イエスから教えられた祈りを、今日も心から祈りたい。</p>
<p>12日 (月) 民数記 24章</p>	<p>「バラムは、イスラエルを祝福することが主の良いとされることであると悟り、いつものようにまじないを行いに行くことをせず、顔を荒れ野に向けた」(1節)。自らの務めであるはずのまじないを行うことをやめ、主の示されたことに対して従順に、荒れ野にいるイスラエルの民を見つめたバラム。彼のように、澄んだ目をもって主の示される幻をいただきたい。</p>
<p>13日 (火) 民数記 25章</p>	<p>「それゆえ、こう告げるがよい。『見よ、わたしは彼にわたしの平和の契約を授ける。彼と彼に続く子孫は、永遠の祭司職の契約にあずかる。彼がその神に対する熱情を表し、イスラエルの人々のために、罪の贖いをしたからである』(12、13節)。主は、平和の君である永遠の祭司を人として人の中に送り、わたしたちすべての罪を贖ういけにえとしてくださった。</p>
<p>14日 (水) 民数記 26章</p>	<p>「その中には、モーセと祭司アロンがシナイの荒れ野でイスラエルの人々を登録したときに登録された者は一人もいなかった」(64節)。「なぜエジプトから導き出したのか?」。主に信頼することなくつぶやき続けたイスラエルの人々は、乳と蜜の流れる地を見ず死んでいった。御子を遣わしてくださるほど私たちを愛してくださる主に感謝して降誕節を過ごしたい。</p>

聖書日課 『からし種』 2022.12.11-12.18

<p>15日 (木)</p> <p>民数記 27章</p>	<p>「男の子がないからといって、どうして父の名がその氏族の中から削られてよいでしょうか。父の兄弟たちと同じように、わたしたちにも所有地をください」(4節)。当時、登録の数に入れられることさえなかった女性でありながら、男の子のいない父の名のために所有地を願い出たツェロフハドの娘たちの勇気と、彼女たちに嗣業を与えられた主のみ心を思う。</p>
<p>16日 (金)</p> <p>民数記 28章</p>	<p>「イスラエルの人々に命じて、こう言いなさい。あなたたちは、わたしの食物である献げ物を、燃やしてささげる宥めの香りとして、定められた時に忠実にわたしにささげなさい」(2節)。かつてイスラエルの人々は、毎日また安息日ごとに忠実に宥めの香りとして焼きつくす献げ物をささげた。2000年前、主は御子を遣わされ、永遠の宥めの香りとしてくださった。</p>
<p>17日 (土)</p> <p>民数記 29章</p>	<p>「第七の月の一日には聖なる集会を開く。いかなる仕事もしてはならない。角笛を吹き鳴らす日である」(1節)。この日、神が民を覚えてくださり、民が神を覚えるようにと、ラッパは吹き鳴らされたという。わたしたちが神を忘れてしまう時があっても、神はわたしたち一人一人を覚えていてくださるという確信をいただき、祈りによって主につながる幸いを感謝する。</p>
<p>18日 (日)</p> <p>民数記 30章</p>	<p>「誓願や苦行による物断ちの誓いはすべて、彼女の夫がそれを有効にも、無効にもすることができる」(14節)。妻は夫の「所有物」と考えられていた時代の戒めの言葉。それに対して主イエスは、女性一人ひとりが神の前に主体をもった礼拝者であり、その祈り、願い、涙を大切に受けとめ、彼女たちとの対話を喜ばれた。その主と共に礼拝できることを喜びたい。</p>